大阪大学RISSの夢

夢はバラ色

盛岡　通*

Dream or Ambition of Director of RISS, Osaka University

Key Words：Sustainablity Research, Eco - Innovation of Industrial Society, Strategic Initiatives for Social Partnership

1．大阪大学サステイナビリティ研究機構の誕生

スーパーCOEの枠組みで東京大学，大阪大学等の5大学のサステイナビリティ学連携機構（IR3S）が発足したのは平成18年の2月であった．大阪大学にはサステイナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）が設置され，学内の約40名の兼任教員と約10名の特任教員（常勤）および研究員・職員（常勤）が新しい領域の開拓をおこなっている．

融合型の研究教育組織にはいつも困難や障害がつきものであるが，この機構は恵まれている．大学の連携で協力しつつ，一方で競争するので，各大学で新しい取り組みがあると，別の大学もやりやすいし，競って新味を出そうとするから，刺激があって良い．たとえば，アカデミックスタッフと言う専門職の任用はあっという間に他大学にも広がった．これまでだと国際交流でも学会開催でも学術雑誌企画でも技量も経験もない事務員があてがわれていても変えることができなかった．外部資金の導入の依頼先でも，複数の大学がバッティングすることも少なくないが，他方でアジア循環型プロジェクト等では大学共同なら拠金してもよいという申し出もある．それぞれが国際会議を開催することは当然であり，COEを獲得した研究単位が集まって外向けにアピールするタイプも，既定の国際会議に相乗りして新領域の取り組みを強調するタイプもあるが，一大学の試みは直ぐに他の大学でも再現され，改良される．研究・教育の新方式を競い合うという趣旨は活かされているようだ．

それだけに大阪大学はどう取り組むのかが問われている．まず，実直に取り組んでゆく方向としては明確であり，それは「エコ産業技術の開発と社会システムの設計を通して持続可能な社会をつくる」と言うものであった．しかし，革新力と効果の高い技術を短期間で開発することは容易ではない．また，社会システムの設計となればそれこそ組織や地域のガバナンスそのものを相手にしなければならない．しかも，4年後には機構そのものの継承が問われる．マッチングファンドや分野融合など4年後までの切り口は，ある意味では出尽くしている．そこで，先回りして採用したのは，実践の場をつくると言う意味で，オンサイト・センターを設置することであった．それは，逆に10年後までの活動を想定して，その時期までに継続する研究センターを設け，そこでの大学院研修・演習や産学・社学連携の共同研究のテーマ像やプロジェクト・イメージを設定し，そこから4年間，3年間，3年間の期間の研究，教育を逆に現在の方に戻して描いてゆくアプローチであった．シナリオ研究でのバックキャスティングを研究プランニングにも活かそうとした．

オンサイト・センターは，新たな海外研究拠点の構築とも関係するが，それはまだ芽を吹くに至っていない．まだ，国内拠点にとどまる．現地研究教育施設には学内の方式を離れて，より野心的で理念的な実行プログラムや，融合かつ柔軟な組織編成を構想することができる．夢を語り，大胆な試行を励ます

*Thoru MORIOKA
1946年12月生
1974年京都大学大学院工学研究科博士課程修了
現在，大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻，専攻長，教授，工学博士，環境システム，環境リスク，環境マネジメント
TEL　06-6879-7676
FAX　06-6879-7679
E-mail：tmoriot@env.eng.osaka-u.ac.jp

組織文化がもっとも大きな財産になるとおもわれる．その第一期の中核プロジェクトや工房棟，研究棟の第一期の姿が見えるのは，平成１８年の秋であるが，それ以降もご意見を伺って充実させてゆきたい．

2．RISS開設記念シンポジウムで強調したこと

6月30日に開催されたRISS開設記念シンポジウムでは，3つの技術（エコエネルギー，エコデザイン，エコプロセス）の3つの方向性（基幹技術，システムウェア，地域構成システム），4つの社会システム（経済，法制，政治，文化）の3つの方向性（規制，市場手段，情報誘導）を示した後に，産業工場，都市（農村）地域，国，東アジアなど国際地域の空間で「産業社会の転換を図るサステイナビリティ・イニシアティブ」の考え方を紹介した．このような体系的なスキームは社会システムから技術を組み入れつつも単純に「規制か市場か」を問う京大のアプローチとは対照的であり，多面的かつシステムアプローチとなっている．また，東大の課題症候群の認識と国際的拠点形成志向と国際会議開催志向でアカデミアを構想するアプローチとも一味違うものとなっている．

しかし，サステイナビリティは永遠に達成できない側面をもつがゆえに，資源経済の3原則やナチュラル・ステップの原則として繰り返す言辞にとどまり，識者の間で手を変えて何度も同じ軌跡の思考を描くこともありえる．また，国際地域の環境調査や，地球の大規模なシミュレーターの環境再現をもってサステイナビリティへの接近を図ると，新しい発見は追加的な読者をひきつけるが，サステイナビリティのソリューションには仮説は乏しい．これという解答は用意されていない．

RISS開設記念シンポジウムでは，最後に4つの進め方を提案した．一つは企業トップのサステイナビリティへの決意と取り組みを紹介する会合とその発信媒体の創設である．CEOイニシアティブは，産学連携や社学連携の展開を促し，引き上げ，水平展開を図る役割をもつ．第二は首長会議である．すでに環境自治体連合などの政策志向型の協議体が存在する．しかし，サステイナビリティとなると自分の首長の任期期間というより息の長い取り組みになるので，そういったライフロングな取り組みを手がけたいとする首長の参画するプラットフォームを形成したい．第三の試みはNPO/NGOのネットワークの構築であるが，これは今までの問題提起型の市民運動の側からの組織形成というよりも，自らを支える財政力を築き事業創生を図る力を志向するネットワークであり，サステイナビリティに相応しい「知恵と行動力のストック」を高めようと提案した．

第四の提案は，学術の新たなリベラル・アートとしてのサステイナビリティ学を関西の地から多くの大学に提案してその実践的な推進組織をつくり，その発展をめざそうと言う提案である．ちなみに協力機関の4つを含め，9つのIR3Sのメンバーは大阪より西には位置しない．実は，西日本の歴史的に成熟した地域ほどすでに斜陽や更新のなかで不足や競合に遭遇し，継続や継承そして遺贈など持続可能性につながる思想や営みや育んできたのではないかと思われる．

3．サステイナビリティ学は世紀の視点で

サステイナビリティを確かに高めようとすれば，判断や評価のものさしが必要になる．もともと，あらゆる人間活動に直接による消費に加えて間接の排出を考えると二酸化炭素の大気圏への放出と縁のない行為は見当たらない．科学的には，ライフサイクル分析によって間接あるいは源流のサプライチェーンや川下のプロダクトチェーンに沿った経済活動を特定し，それによる負荷を算定することができる．しかし，それは多いか少ないかの相対比較であり，結局は人間が存在すること自体が地球システムの持続のためにはマイナスであるような印象にたどり着き，悲観論が生じやすい．

それだけに，国民経済，企業会計，あるいは地域社会や都市のレベルで持続可能性を判断し，その大局的な前進の状況を把握するような枠組みがほしいものである．しかも短期的なフローを追いかけるのみでなく，それが蓄積して状態や構造を左右するような集合的かつ象徴的な指標がほしいものである．現在のところ，提案されている持続可能性の枠組みは，脱温暖化，資源循環の資源効率，種の多様性と自然共生，低リスク社会の健康増進，等の環境面を前面に出しつつ，食料と栄養のサービス，人権と学習・人材育成，フェアトレードと互恵通商，飢餓や貧困からの脱出，公正で透明な社会制度設計，等を

社会発展の違う国・地域に適用できるように網羅的，かつ整合性のある構成で示したものである．

これらの指標は集合効果があってはじめて変化するもので，その限りでは信頼性はあるが，代替案を提案したときにはそれを当てはめてチェックする手順までは示されたことにはならない．言い換えると，プロジェクトや政策的なイニシィアティブを構想するときに，脈絡（文脈）としての適合を判断するレベル，推進の力の注ぎ方の集中度（優先度）を判断するレベル，それに政策の序列や相対的重み付けを判断するレベル，などに応じてサステイナビリティ適合を審査するもう一つのアプローチを並行して試みる必要があろう．

近代化をこの100年余りで達成し世界の有数の産業社会を構成した日本が責任を持って提案するサステイナビリティとは，この100年の歩みを今の世代の責任を持っていかに総括し，現時点で次の100年に向けて未来の世代にいかなる礎を築くかという問に答えるものであってほしい．その点から，産業社会の担い手である企業の起業（創業）100年記念の質を吟味し，サステイナビリティの視点から見直し，あるいは持続可能な未来から逆照射して〔持続可能な事業像を導く創業100周年事業〕とする試みを提案している．RISSは企業の創業100年事業を支援し，評価し，サステイナビリティをリードする事業体となる道をともに探り，展開してゆくことをRISSの活動の重要な柱としたい．各位のご理解と支援を切にお願いしたい．